

第11回 3D教育研究会 開催レポート

ダイジェスト



2010年6月12日（土）、東京都文京区本郷にある東洋学園大学の会議室にて、第11回3D教育研究会が開催された。12校の学校および学校関係者が多数参加。

第1部は日本教育大学院大学、学校教育研究科・研究科長の花田修一先生をお招きし「中学校、高等学校におけるディベート的討論演習」と題した講演および演習が行われました。自身でも書籍や雑誌等にて数々の執筆をされており、それらの資料も交えながらの講演となり、実際に出席された先生方同士によるディベート体験も行われ、貴重な時間となりました。



その後は、意見交換会としてアンケート集計報告（東京学園・高野淳一先生）と各学校の3D教育プログラムの活用状況を発表され、各先生方による発言や意見も飛び交い、充実した時間となりました。

第1部「講演会」

“中学校、高等学校におけるディベート的討論演習”

●順天中学高等学校の片倉先生より挨拶



本日はお忙しい中、足を運んで頂き本当にありがとうございます。
今回お迎えしている花田修一先生は日本教育大学院大学の研究科長もなさっています。毎回講義には『ディベート』の講義も入れていらっしゃるそうなので、今回はディベートの研修をしていきたいと思います。

今回は論理的思考力やコミュニケーション能力等の一貫でもあります『ディベート』というものを取り上げて研修していきたいと思います。このディベートを勉強することによって社会的な異質の集団における交流能力、異文化との交流をきちんと出来る。また、対立を処理して解決する能力を養うことが出来るということです。どんな文化があっても必ず対立は生まれます。考え方が違う訳ですから。そういう場合にどうやって解決するのか。これ、日本人は非常に下手なんですよ。だから日本の政治や経済は乱れてしまうのです。感情が先に出て論議にならない。解決しようとする気にならない。そんな時代の中ですから是非このディベートを通して、そういう力を身につけさせることが大事なのではないかと思います。今回はディベートの考え方、方法を研修して行って生徒に還元していきたいと思っています。 どうもありがとうございました。

片倉 敦先生（順天中学校・高等学校副校長）

日本教育大学院大学 花田修一先生による講演



先生方こんにちは。これから約30分程度「ディベート」とは何なのか？これが教育に役に立つのか？というお話をします。その後、お隣の部屋に移動し実際に高校生を想定して模擬授業をやってみようと思います。

結論を言います。教育の方法に“絶対”はありません。よってディベートも欠点もあり長所もあります。ですから良い所を教育に取り入れて、マズい所は他の方法を取り入れれば良いですね。ディベートのどこを使えば良いかという部分を話していきたいと思います。

今日は基本的な知識と技能だけ先生方が身につけていければ、あとはどんどん活用出来ます。

●この後、花田先生により作成されたレジュメ『ディベート教育』を参照しながらの講演が行われた。

【学習のねらい】

『ディベートとは、ある論題（テーマ）に対して、肯定（賛成）側と否定（反対）側とに分かれ、一定のルールに従って議論する討論の一形式である。判定は、第三者である審判団が行う』

立場を明確にし、理由や根拠を挙げて論理的に考えたり、論じたり、批判したりする力を育てることができる。また、必要な情報を収集し、効果的に活用することで、メディアリテラシーの力も身に付けることができる。

以上で、他の話し合いと異なることは審判団がいるということです。これを嫌う現場の先生もいます。ディベートのデメリットはAかBかという二者択一ですのでCやDといった中間を認めない訳です。ですから、ディベート学習した後はフリートキングや自由な意見を書かせるなどといったことで対応出来ます。

●花田先生によりランダムに指命された先生方によるレジュメの朗読の後、実際の解説が行われた。

※以下、その題目と花田先生による解説です。

1. ディベート教育がなぜ必要なのか

「論理的で批判的な思考力」「相手や目的に応じて適切に話す力」「共通点や相違点を的確に聞き取る力」「必要な情報を効果的に活用する力」「集中力」などを育てる事が出来ます。

発祥のイギリスでは学校教育でも生徒向けに導入されたり、特に政治家、弁護士、外交官などを志す学生には伝統的に行われています。

2. ディベートの手順はどうすればよいか

論題の決定～立場の決定～情報の収集～立論の構成～討論の実際～判定と講評

3. ディベートの論題はどう決めればよいか

私の経験上ディベートが成功するか否かは論題が90%決めます。考えることに価値があるという論題を選ばなくてはなりません。

(例)

- ・中学生は大人料金（運賃）にすべきではない。
- ・携帯電話は学校に持ってきてよい。
- ・学校帰りに寄り道をしてよい。
- ・すべてのゴミは有料にすべきである。
- ・年賀状は必要ではない。
- ・死刑は廃止すべきである
- ・給食は弁当にすべきである。
- ・中学生はアルバイトをしてよい
- ・制服は自由にすべきである。
- ・電車の優先席は不要である 等々

4. ディベートの立場はどう構成させればよいか

一般的には「双括型」を使います。

自分たちの立場の主張→主張のための理由や根拠→反対尋問の予測→最終弁論での再主張

その議論に必要な事実や情報やデータをインターネットや図書館の資料やインタビューやアンケートなどを活用して説得力のある内容とする。

●ここで実際に「電車の優先席は不要である」という論題をもとに、3分間それぞれ隣同士で肯定側、反対側の根拠や理由を話し合う場が持たれた。

【肯定派の意見】

- ・優先席があることによって、優先席以外では譲らなくても良いといったことに繋がっていくのではないかな。

【否定側の意見】

- ・優先席があることによって、譲るということに抵抗がある人も譲りやすくなる。

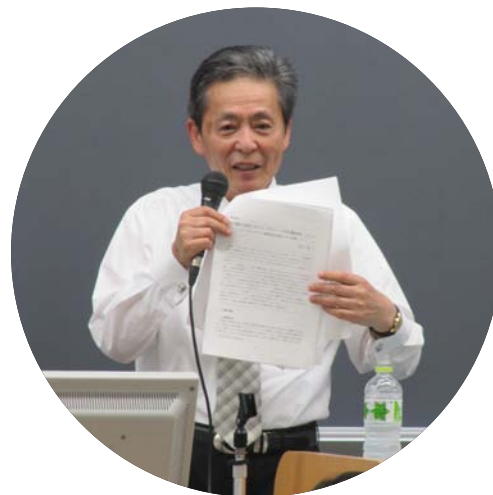
色々な意見が出たかと思いますが、この要領で生徒達にペアトークをさせます。これによって、日頃発表や発言をしない生徒も全員が発言せざるをえなくなります。

授業が活性化しますので、ディベートの有効性はあります。

5. ディベート討論をどう進めればよいか

(50分授業の例)

- (1) 準備 (5分)
- (2) 肯定側の立論 (5分)
- (3) 否定側の立論 (5分)
- (4) 作戦タイム (3分)
- (5) 否定側の反対尋問 (5分)
- (6) 作戦タイム (3分)
- (7) 肯定側の反対尋問 (5分)
- (8) 作戦タイム (3分)
- (9) 否定側の最終弁論 (3分)
- (10) 肯定側の最終弁論 (3分)
- (11) 判定と講評 (5分)



6. ディベート討論をどう判定すればよいか

判定の際は、できるだけ客観的に評価させる。また、講評の際には良かった点と次のディベートにつながる課題を具体的に指摘すると効果的である。

～まとめ～

ディベートが持っている良さは論理的・批判的思考であります。非難と批判は違うということを中高生に教えてください。非難するという事は一方的になじることであって根拠も理由もありません。批判というのは正当な評価ができる力であり、その為には理由や根拠が揃っていなければ批判できません。批判力はしっかり養わないと21世紀生きていけません。特に中高生はこれから、きちんと正当評価できる力を色々な授業でも養わなければなりません。ディベートでもそうです。信憑性があるのか？ないのか？本当か？そういうことはやはり疑っていく力を身につけさせておかないといけません。

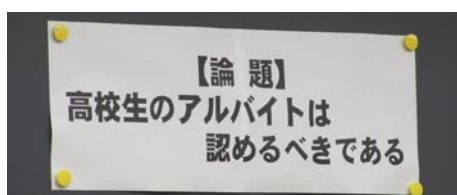
それから、適切な言語表現力、共通点や相違点を聞き分ける力。色々なメディア情報を活用する力。そういった事がディベートでは養うことができます。



●講演後に会場を移動し、実際に参加者の先生方によるディベート体験が行われた。

「高校生のアルバイトは認めるべきである」を論題に肯定派と否定派に分かれ、教員の立場では無く高校生の立場をシュミレートした体験授業となった。時より花田先生のアドバイスや改善点の指摘も見られ、先生方にとっては非常に内容の濃い時間となったであろう。

先生方によるディベート体験の様子



「意見交換会」 各学校における3D教育プログラムの活用状況

第11回3D教育研究会アンケート、テーマ「各学校における3D教育プログラムの活用状況～年間カリキュラム・診断データの活用」今回は年間カリキュラム、そして診断データの活用について、アンケートを実施し、ご回答いただいたものをまとめました。こちら、年間カリキュラム作成、どのような観点で、どのようにプログラムを組まれているか、という質問をいたしました。

お答えを見てまして、本当に学校ごとにまちまちだなと。例えば学年主任が、その時期に必要な事柄を選んでいる。つまりその学年の生徒にあったものを教材として採用されているというところもありますし、中学生で各学年で様子を見ながらスケジュールを立てている。それからおもしろいなと思いましたのは、内容の変更も良くあるということで最初に立てた計画にこだわらずにその時必要だと思われたことを実施されているというところもあるんだなと思いました。全体的に見ていますと中学校ですとか、あるいは高校の低学年ではこのカリキュラムの内容が自己理解、マナーや道徳教育、また自立性を高めるCPを高める様な教育に重点をおいている学校が多いというように思います。

一方、高校の高学年になってきますとやはり多いのは進路学習です。進路に直接関する学習ですとか、または広く論理性を高めたり、表現力をつけたりするような、推薦入試やAO入試で必要になるようなそういった能力を高める教材を多く盛り込まれている学校も見られます。学年に関わらず、コミュニケーション能力を高めることを目標にしているのはほとんどの学校に見られました。

まとめてみて見ると、中学校、または高校の低学年では、マナーですとか、道徳ですとか、自分に対する理解をその生徒の中に入れていく、インプットの面も重要視されていて、自分の中に表現するものを作った上で、高校の学年では実際に進路の実現に向けて活用できるような力を育てるという方向性を持っているんだな、と思いました。これが、年間カリキュラム作成についての簡単なまとめです。

続きまして、エゴグラム診断データの活用。こちらは、生徒の把握について、生徒理解、普段の授業、クラブ活動では気づかないようなことまで、このエゴグラムの診断データが活用出来るということで、これはほとんどの学校で把握している、理解をしている、とお答えいただきました。また、生徒面談の資料としての活用も中心です。なかには、学習指導上の参考にする、担任、生徒のコミュニケーションツール、そして生活、進学という項目が入っています。また、診断別にピックアップして、特にAの低い生徒には、学習スケジュールを時間をかけて指導していると、非常にきめの細かい学習指導で生かしている学校がありました。

それから、クラス替えの時に活用されている学校。また、特におもしろいなと思いましたのは、学年の中でエゴグラムの解析、研修会というのをされて、その診断結果から、学年、クラス、個人に対して目標設定をされているということで、基本的には担任が生徒把握の一つの手段として使っているこのエゴグラム診断ですが、学年の中で目線をそろえるですとか指導を共有するという使い方をされている学校があって、これは非常に手間はかかると思うのですが有効な使いかたをされているなと思いました。

非常に簡単ではありますが、まとめとしては以上です。(東京学園高等学校：高野淳一先生)

この後の意見交換会では、全ての参加校の先生方による貴重な意見や感想が飛び交い、充実した場となった。

懇親会



懇親会場にて撮影した参加者全員での記念撮影（写真上）



出来る・大丈夫・大成功

3D 教育研究会

2010. 6.12 第11回 3D教育研究会 in 東洋学園大学

株式会社 K A 教育

〒173-0012

東京都板橋区大和町 12-12

03-6784-7675